〔平家物語六〕紅葉の事

あんげんの比ほひ、御かたたがひの行幸有しに、○略中いつも御ねざめがちにて、つや〳〵御しんもならざりけり、

〔倭訓栞中編於三十〕おしづまり　日中行事に見ゆ、御寢をいふ也、

〔日中行事〕御しづまりの程に、殿上の臺盤を校書殿のかべのもとに、よせかけさせて、たゝみよせて、をの〳〵ふしあへり、

〔源氏物語二帚木〕ゑいすゝみて、みな人々すのこにふしつゝしづまりぬ、

〔倭訓栞前編於四十五〕おほとのごもり　伊勢物語、源氏に見ゆ、大殿隱の義御寢をいふ也、酌會に、婦人稱寢曰宮、宮者隱蔽之言也といふに同じ、萬葉集に、大殿をつかへまつりて、殿ごもり（コモリ）隱いませばと見ゆ、

〔類聚名物考人事十二〕おほとのごもり　大殿籠

夜のおとゞにこもらせ給て、御寢なるをいふ、轉ては只寢まするをもいふ、

〔塵袋六〕一御寢ヲヲトノゴモルト云フハ御殿ニ籠ル心歟如何

サモ申シツベキ事ナリ○略下

〔枕草子十二〕うへ○一條のおまへのはしらによりかゝりて、すこしねむらせ給へるを、かれ見奉り給へ、今はあけぬるに、かくおほとのごもるべき事かはと申させ○藤原伊周給ふ

〔玉勝間八〕おひなるおよる○略中

あづまにて寢ることをおよるといふ、御晝なる御夜なるといふこと也、○略下

〔古今著聞集五和歌〕永萬元年九月十四日、五更におよびて、頭亮の書札とて、かみやがみにたてぶみたる文を、頭中將家通朝臣のもとへもて來りけり、○略中もとのごとくかみやがみにたてぶみて、